

EAST TIMES

東日本保証広報誌 2026 夏号



特集

「ひろげる」

特集「ひろげる」

「ひろげる」をキーワードに、社会資本整備に関わるさまざまな取り組みについて考えていく

12 枠をひろげる

Photo Gallery
企業広報の枠を「ひろげる」
新たなコミュニケーションの場



こまつの杜(石川県小松市)

04 理解をひろげる

暮らしの中の水のストーリーとして
水インフラへの理解を「ひろげる」

巻頭インタビュー

ウォーターエバンジェリスト
一般社団法人Water-n 代表理事 奥田 早希子 氏



14 『建設フレッシュマン GUIDE BOOK 2026』および 『建設技術者 START BOOK 2026』のご紹介



08 用途をひろげる

防災拠点の用途を「ひろげる」
平時は健康を核に、接点を生み出す

国土交通省 中部地方整備局 木曾川上流河川事務所 総括保全対策官
岐阜市 危機管理部 水防対策課 水防対策係
ドルフィン株式会社 ドルフィンスイミングスクール 選手コース ヘッドコーチ

井川 陽二 氏
河原 侑祐 氏 川口 幸男 氏
石塚 功一 氏

16 連載「けんせつのでんせつ」シリーズ87 造物主

建設産業図書館事務局 江口 知秀



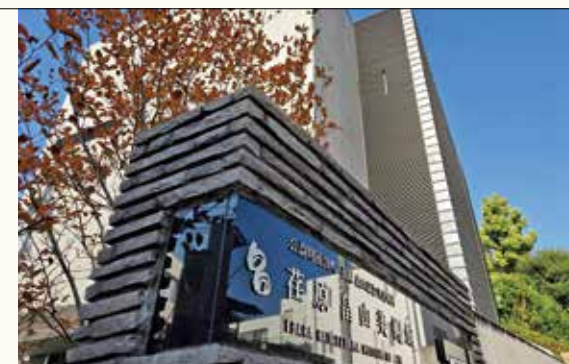
プラトン
(当館職員 上原由子画)

18 トピックス 三重支店から 武家町の記憶をひろげる 御城番屋敷と松坂城跡



御城番屋敷(三重県松阪市 写真提供:松阪市観光交流課)

10 展示・収蔵空間をひろげる 地域の話 よりみち この街 Vol. 37 増築、新築によって、展示・収蔵空間を ひろげた美術館 鈴木 伸子



荏原 畠山美術館 新館(東京都港区 写真提供:同館)



表紙の写真

INAXライブミュージアム
(愛知県常滑市)

ポルトガルの現代アーティスト、ディオゴ・マシャード(ADD FUEL)によるインスタレーション作品《A JANELA(窓)》。ポルトガルと日本をつなぐ象徴的な「窓」として構想された。大阪・関西万博ポルトガルパビリオンに屋外展示された本作品をポルトガル政府観光局から寄贈され、常設展示している。

●P12-13 Photo Gallery
「枠をひろげる」をご覧ください。



理解をひろげる

特集「ひろげる」

暮らしの中の水のストーリーとして
水インフラへの理解を「ひろげる」

ウォーターエバンジェリスト
一般社団法人Water-n 代表理事

奥田 早希子氏

巻頭インタビュー

—— 上水に関心は向いても、下水には目をつぶる。そんな姿勢が珍しくない中、令和7年(2025)1月、埼玉県八潮市で下水道管の破損に起因する道路陥没事故が起きた。水インフラの維持管理・運営のあり方はいま、深刻な課題だ。その解決に向け水インフラへの理解をどう広げるか——。伝道師役のウォーターエバンジェリストで一般社団法人Water-n(ウォーターン) 代表理事の奥田 早希子氏に聞いた。

—— 埼玉県八潮市の道路陥没事故をきっかけに下水道管の維持管理に焦点が当たりました。水インフラの現状をどう見ますか。

奥田 老朽化が進んで更新投資を必要としているという点は、すでに指摘されている通りです。ところが、公共側にはお金もなければ人材もない。だから、更新が思うように進まない。埼玉県八潮市の道路陥没事故は決して特別な事例ではありません。全国どこでも起こり得ると覚悟すべきです。

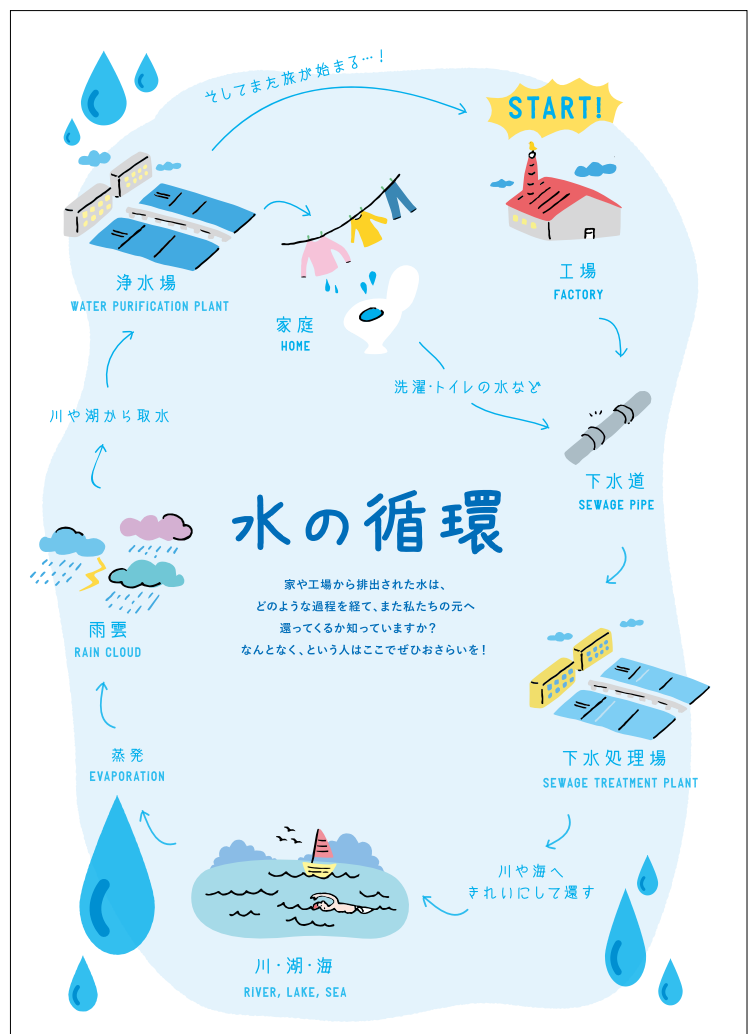
維持管理・運営の透明化へ
ウォーターPPP※の導入を

—— 維持管理・運営の方法として

国は官民連携のウォーターPPPを推進しています。やはりそこに、可能性がありますか。

奥田 可能性は感じられます。しかし、PPPを導入しさえすれば、「マネジメントコストをそれまでに比べ安くできる」「利用料金の値上げを抑えられる」といった考え方で始めるのは違う。コスト削減の手段と考えるべきです。それまでの維持管理・運営が不十分だったとすると、PPP導入後、マネジメントコストや利用料金は上がる可能性もあるからです。

それより大切なのは、維持管理・運営の透明化につながるという点です。官民連携で取り組みにはまず、運営面での収支や維持管理の状況をしっかりとさせる必要があります。それによって運営母体の経営状況や資産状況が明確になります。この点が、非常に大切です。



暮らしの中のすべてのものの背景には水のストーリーがある
水を還す「ヒト・コト・モノ」マガジン『Water-n』 発行:一般社団法人Water-n

—— ウォーターエバンジェリストという肩書きをお持ちです。これは、オリジナルなのですか。

奥田 はい。文字通り、水のことを伝える人。水の伝道師です。

—— ウォーターエバンジェリストとしての活動には、どのようなものがありますか。

奥田 まずは、社会と下水道業界の間で生じるギャップを埋めるための活動です。

平成12年(2000)前後にエコブームが到来し、飲料水の入ったペットボトルを腰の辺りにぶら下げて持ち歩くのが流行しました。ただ、「エコ」と称して水にこだわるのに、使った後の水がどうなるのか、下水には目を向けない。むしろ、目に入れたくない人が割と多かった。

そこに、残念な思いを抱きました。汚した張本人に代わって汚れた水をきれいにしてくれる下水道があり、そこで働く人たちがいる。とてもありがたいことなのに、社会はそう思っていない。両者の間に溝があると感じたのです。

※ ウォーターPPP: 行政(Public)と民間(Private)が連携(Partnership)し、上下水道の維持管理・運営を進める官民連携の手法。民間のノウハウを活用して効率化を図り、安全で持続可能な水インフラの確保を目指す

一般社団法人自ら立ち上げ
サポート企業と大学で講義

――溝を埋めるのは、そう簡単ではなさそうです。

奥田 確かに、下水道業界の言い分ばかり押し出すと、生活者はうつろしく感じがちです。そこは当初、もどかしく感じていました。

そこで発想を改めました。暮らしの中のすべてのものの背景には水のストーリーがあるはず。例えば衣類や文房具などを製造し生活者の手元に届けるまでの間、どこかの工程で必ず水を使用します。その工程には、汚れた水を排出し、浄化するシステムが組み込まれています。システムを稼働させる人もいるのです。

そうしたシステムや人と使用済みの水である下水をつなげていくことを思い立ち、一般社団法人Water-nを立ち上げ、水を選す「ヒト・コト・モノ」マガジン『Water-n』を編集・発行し始

めました。

――活動の成果と受け止めている出来事がありますか。

奥田 『Water-n』の発行を支えてくださるサポート企業とともに、大学で協働講義をやらせていただく機会を得たことです。対象は、土木工学系の学科に所属する150人規模の学生です。講義での学びをきっかけに、サポート企業の存在を初めて知り、その企業への就職を決めた学生もいます。

この学科ではもちろん、全員が水インフラ企業に就職するわけではありません。ただ、どの企業でも、水を使用し、使用済みの水を排出しながら製品をつくつていきます。どの企業に就職しようとも、水をできるだけ使わないようにしたり、汚さないようにしたりすることに注意は払えます。そこを忘れずに社会に旅立つてほしいという思いで講義に臨んでいます。

――水インフラへの強いこだわりを感じます。どういう思いや経緯で水インフラの世界と関わるようになったのですか。

奥田 原点は、出身地である兵庫県尼崎市での体験です。私が生まれた当時は、公害がひどく、近所の河川は汚いというより臭かった。そ

の河川を前に気付かされたのです。

河川には空き缶や自転車などが投げ捨てられていました。それでも、空き缶や自転車なら拾い上げれば河川はきれいになります。しかし、汚れた水そのものをきれいにするのは簡単ではありません。水は汚さないように賢く使うべきではないかと考えるようになり

ました。さらに社会に出てから、環境新聞を編集・発行する株式会社環境新聞社に転職しました。前職で公害防止管理者の資格を取得していたことから、編集部では水ビジネス担当を割り当てられます。水インフラとの関わりはこうして始まりました。

インフラ産業の人材育成へ「オソト」との融合を促す

――平成18年（2006）にウォーターエンジニアリストとして独立さ

というアプローチです。その必要性に気付かされたことで、視野がぱっと開けました。

――一般社団法人Water-nでの活動にも、そうしたご経験は生かされていますか。

奥田 そうですね。水インフラに関わる人の視野を広げたり思考を広げたりする取り組みとして、水インフラマネジメント大学という学びの場を開いています。2021年度に始めた取り組みです。2026年度は26人の新入生を6期生として迎えてスタートしています。

狙いは、インフラ産業と「オソト」を経営視点で融合させることができる人材育成のサポートです。異業種や他社といった「オソト」のを取り入れることで視野を広げ、その成果を自身のビジ



水を選す「ヒト・コト・モノ」マガジン『Water-n』。これまでに19号発行している



水インフラマネジメント大学講義の様子
(写真提供：一般社団法人Water-n)

な行政サービスを提供しているのは、水インフラばかりではないという点です。それまでは、下水道こそが大切という思いが強かった。しかし、そうではない。下水道はほんの一部でしかなかったのです。

そこで発想を広げ、まちづくりの視点を持つようになりまし。まず暮らしやすいまちをどうつくるかというまちづくりの視点に立つて、そこから水インフラのあり方を考える

ネスにつなげてほしいという思いで続けています。

――「オソト」という考え方には、「暮らし」を中心に考えるという『Water-n』創刊時の思いと重なるものを感じます。では最後に、水インフラの維持管理・運営という観点で建設業界の方々に伝えたいことをお聞かせください。

奥田 一つはまさに、「オソト」の視点です。業界外にも思考と心の門戸を開き、さまざまな分野の方々と協働する姿勢が求められると思います。もう一つは、請負体質からの脱却です。公共の仕事を請け負うという受け身の姿勢から抜け出て、社会課題をどう解決するか、まちの未来をどう描いていくか、「創造」の姿勢に転じる必要性を感じています。

奥田 早希子(おくだ さきこ)

【現職】
一般社団法人Water-n 代表理事
【略歴】

1970年兵庫県尼崎市生まれ。1995年筑波大学大学院修士課程理工学研究科化学専攻修了。1996年株式会社環境新聞社入社、水環境・上下水道分野を取。2006年ウォーターエバンジェリストとして独立。2010年東洋大学社会人大学院修士課程経済学研究科公民連携専攻入学、成績優良者対象の奨学金を2年連続取得、2012年修了。2014年積水化学工業株式会社入社 環境・ライフラインカンパニー バリューチェーン事業推進部マーケティンググループ配属(契約社員)(~2015年)。2019年一般社団法人Water-n設立、代表理事に就任(現職)。

【主な公的活動など】
東洋大学PPP研究センター リサーチパートナー、株式会社ダイキアクシス 社外取締役、CWP GLOBAL株式会社 アドバイザー、国土交通省インフラメンテナンス国民会議実行委員、公益財団法人水・地域イノベーション財団 評議員、公益社団法人日本下水道協会 下水道GX促進調査専門委員会 特別委員(2024年6月~2025年6月)、公益社団法人雨水貯留浸透技術協会 機関紙編集委員、下水道広報プラットフォーム企画運営委員、高専向け「インフラマネジメントテクノロジーコンテスト」実行委員(PR部会長)、環境省浄化槽リノベーション推進検討会委員(2019年7月~2020年3月27日)ほか



奥田 早希子氏 著書「経営トランスフォーメーション〜下水道ビジネスの変革者たち」(2024年/環境新聞社)

※ 建設産業図書館で所蔵しています



防災拠点の用途を「ひろげる」 平時は健康を核に、接点を生み出す

川沿いに立つこのステーションを訪ねた。

の前に岐阜城を頂く金華山がそびえ、その足元に日本三大清流のつに数えられる長良川が流れる。そんな市街地の外れに、早田地区MIZBEステーションは立つ。国が「長良川河川防災ステーション」として基盤整備を実施し、地元市が「岐阜市長良川防災・健康ステーション」として建物を平成28年（2016）4月にオープンさせた。

やエアロビクスなど健康づくりのための教室を1日最大4コマ開く。初心者を対象にまずは気軽に体を動かしてもらおうというのが、教室の位置付けだ。

参加料は無料。「参加者は1日当たり100人強。60〜70代の女性が多かったです。男性も参加しやすいように、週1回19時から筋トレ系の教室も始めました」。教室の責任者である石塚功一氏は話す。

重要水防箇所内に立つ施設 平時は水防団が訓練に励む

場

所柄、河川防災の拠点施設である点は理解しやすい。

施設が立地する一帯には昭和初期まで、長良川からの派川である古川と古々川が流れていた。大雨が降ると派川にまで洪水が押し寄せ、あふれた水は田畑や家を水没させていた。そこで国は、派川の締切工事に着手し、水の流れる長良川に一本化。昭和18年（1943）に築堤を終えた。

ただ河川の跡は、河川防災の面から問題が残る。国交省 中部地方整備局 木曽川上流河川事務所では、長良川沿いの一定区間を、洪水時に危険が予想されること

から重点的に巡視点検が求められる「重要水防箇所」に定め、警戒を怠らない。

この重要水防箇所内に、拠点施設は立つ。「長良川の歴史に極めて縁の深い場所です」。国交省中部地方整備局 木曽川上流河川事務所 総括保全対策官の井川陽二氏は解説する。

河川防災の拠点施設としては、水防活動に欠かせない土砂などの緊急用資材を備蓄するほか、資材の搬出入に必要な作業スペースを確保する。洪水時には、市町村が行う水防活動を支援し、災害発生時には緊急復旧などを迅速に行う基地になる。

実際に水防活動にあたるのは、

国土交通省（以下、国交省）が令和5年（2023）3月に登録制度を始めた「MIZBEステーション」。河川災害の発生時はもとより、平時にも活用できる河川防災の拠点である。先行して同様の役割を果たしてきたのが、制度の創設とともに登録された早田地区MIZBEステーションだ。長良

人々の姿が目飛び込む。ここがまさに、「健康ステーション」としての顔。運動・教室スペースのほか、健康測定コーナー、情報コーナー、コイン式シャワー付きの更衣室で構成する。

運動・教室スペースでは、運営業務を市から受託する地元企業のドルフィン株式会社が週6日、ヨガ

水防法に基づき市が置く地域の水防団だ。「大雨の時、市は全域を見ながら情報を集めたり指示を出したりします。地域のことは事情に詳しい水防団に任せて対応します」。岐阜市 危機管理部 水防対策課の河原侑祐氏は役割分担をこう説明する。水防団は平時、この施設で訓練に励む。

一方、「健康ステーション」を併設した理由は、すぐには飲み込めない。しかし実は、そこにも長良川沿いという立地が深く関わる。岐阜市 危機管理部 水防対策課の川口 幸男氏は計画当時の経緯をこう明かす。

「まず河川防災だけの拠点ではもったいないという考えから、平時にも利用できる施設を、国とも調整しながら検討しました。その

結果、長良川沿いには『高橋尚子ロード』が整備されていたこともあって、『健康づくり』を打ち出したのです」

このロードは、地元岐阜市の出身でマラソンランナーとして活躍した高橋尚子さんが、高校時代に練習を積んだ場所。市はそのルートを整備し、「高橋尚子ロード」と命名していた。

最近薄れてきた災害の記憶 地域住民の意識向上を図る

先

ほど紹介したような健康を核とするにぎわいぶりは、河川防災にプラスをもたらすことが期待されている。井川氏は思いをこう打ち明ける。

「河川防災への意識の高まりを期待します。長良川沿いでは50年前に大雨で洪水が発生し大きな被害を受けた過去があります。ところが最近はその記憶が薄れてきています。この施設の利用をきっかけに意識の向上が図れるといい」

直接のきっかけになり得るのは、水防団の存在である。

「団員は薄紫に黄色のアクセントを加えた目立つ制服を着てい



1階の運動・教室スペースは、市民の健康づくりに貢献

ます。同じ施設で訓練中の団員を目にすることが河川防災を意識するきっかけになることが考えられます」（川口氏）。

河川防災と健康づくりの拠点という実態はまさに、国交省が令和5年3月に登録制度を始めたMIZBEステーションの趣旨に見合うことから、木曽川上流河川事務所と岐阜市は登録を申請。国交省はそれを受け、新規整備2カ所、既存施設8カ所とともに第1回の登録箇所として選定・登録した。

MIZBEステーションとは、災害時に活用する施設は、平時から活用してこそ本来の機能を最大限発揮できるという発想に基づく。

新たなネーミングを広めることで地域住民をさらに引き付けられれば、河川防災の拠点としてこれまで以上に機能を発揮できるだろう。



かわはら ゆうすけ
岐阜市 危機管理部
水防対策課
水防対策係



いかわ りょうじ
国土交通省
中部地方整備局
木曽川上流河川事務所
総括保全対策官

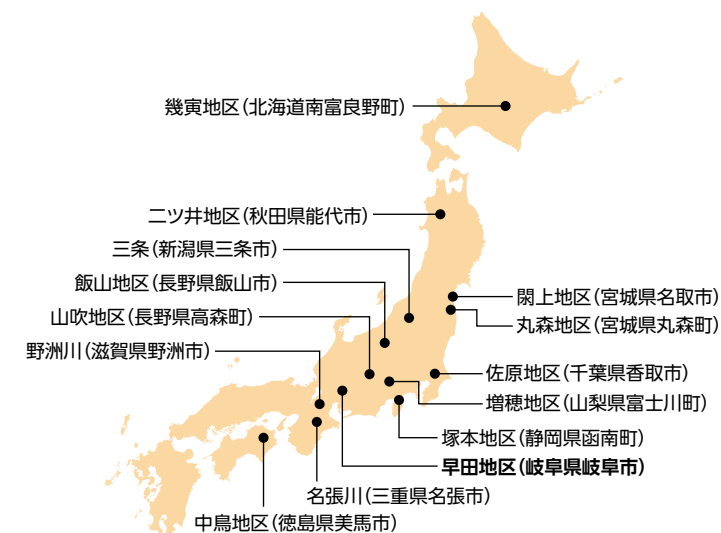


いしづか こういち
ドルフィン株式会社
ドルフィンスイミング
スクール 選手コース
ヘッドコーチ



かわぐち ゆきお
岐阜市 危機管理部
水防対策課
水防対策係

● 全国のMIZBEステーション



（国土交通省ウェブサイトをもとに作成。令和8年（2026）4月現在）



市民の健康増進や防災意識の向上を図る施設として運営されている早田地区MIZBEステーション（写真提供：国土交通省 中部地方整備局 木曽川上流河川事務所、岐阜市）

増築、新築によって、 展示・収蔵空間を ひろげた美術館

デパート、ホテル、庁舎など、さまざまな建物に、本館のほかに新館または別館が設けられている例を見かける。それはあらかじめ計画されたものであったり、必要とされる機能が本館に収まりきらず増築されたものであったり。

中でも今回注目してみたいのは、美術館の新館だ。美術館という施設には、常設展の展示スペースのほか、企画展を行う場所や収蔵庫も必要とされ、拡張していく運命にある建物のようなのだ。

館全体の大改修で、アール・デコにマッチした新館を建設

東京山の手の古くからの高級

住宅街・港区白金台にある東京都庭園美術館は、もとは、昭和8年（1933）、当時世界的に流行していたアール・デコで建てられた朝香宮家の邸宅だった。

戦後は、吉田茂首相の公邸になり、その後は国の迎賓館に。昭和38年（1963）には、現在の新館の場所に迎賓館新館を建設。その後、民営の白金プリンス迎賓館となったが、昭和56年（1981）に東京都が西武鉄道から土地と建物を取得して、昭和58年（1983）10月に東京都庭園美術館として開館した。

美術館となっている旧朝香宮邸の裏の、かつて迎賓館として用いられていた建物は、平成23年

ハイジュエラーの宝飾品やガラス工芸など、その空間にマッチしたテーマの企画展が数多く行われてきたが、新たに広げられたホワイト・キューブ状の展示室では本館とは異なる展示が可能になり、美術館としての機能、展示内容がより深まったと言える。

新館のプロジェクトには、現代美術作家の杉本博司がアドバイザーとして参加。本館との連絡通路に



陶板で覆われた、茶道美術館を象徴する外観



ガラス越しに宝塔が見える新館ホールは、改修後に生まれた見せ場の一つ



ガラスケースへの映り込みを防ぐ黒漆喰の壁を鑑賞者の背後に設置

（写真提供：荏原 畠山美術館）

（2011）から行われた大改修の際に解体。その場所に新館が建設された。

新館の設計は久米設計が担当。本館である旧朝香宮邸との調和を意図し、鉄、ガラス、トラバーチン^{※1}など、朝香宮邸創建当時に



90年以上の時を超えて調和し合う本館（上）と新館（東京都港区）

使われた素材を用いることで、同時代に生まれた建築の再現を図ったという。

新館内には、白い天井、白い壁の「ホワイト・キューブ^{※2}」状の展示空間が設けられている。アール・デコの館である本館では、ヨーロッパの



三保谷硝子店による波板ガラスを使った渡り廊下には、陽光が差し込む角度によって、ハート型の影が現れる



多様な企画を実現できるすっきりとした空間の新館展示室

（写真提供：東京都庭園美術館 / DNPpartcom）

より魅力的な場所になった。

茶道具の世界に通じる世界観で
新生した美術館

東京都庭園美術館にほど近い、白金台の住宅街の二画に令和6年（2024）10月にオープンしたのは「荏原 畠山美術館」。荏原製作所の創業者 畠山一清^{いっせい}が収集した茶道具を中心に、書画、陶磁、漆芸、能装束など日本、中国、朝鮮の古美術品を展示公開し、国宝、重要文化財も数多く収蔵する私立美術館だ。

その前身である「畠山記念館」を休館し、約4年半をかけてリニューアル。本館や庭園などの改築に加え、新館を建設して展示空間を広げた。

基本設計を担当したのは新素材研究所。東京都庭園美術館新館のプロジェクトにも関わった杉本博司と建築家・榎田倫之、2人のユニットで、古代、中世、近世に用いられた伝統的な素材や技法を研究し、それらの現代における再解釈と再興に取り組んでいる。一見して、古いのか新しいのか分からない不思議な風合いが、その建築作品の持ち味になっている。

新館の外壁は瓦のような陶板で

覆われた茶道美術館を象徴するデザイン。2階と地下1階に展示室を設けたことで、全館の展示面積を3倍に広げ、現代美術などの企画展にも対応できる空間となったほか、新たな収蔵庫も備えられた。

新館2階の展示ケースには、和紙畳や吉野杉の框^{かまち}を用い、ガラスの反射を抑えるために黒漆喰の壁面を設置。館内には新たにホール、カフェ、ミュージアムショップも設けられ、施設としても、アミューズメント性も充実した。

美術館全体の敷地面積は変わっていないが、庭園内にあった茶室の一部、蔵などを撤去、移設することとで新館を建設する場所を確保している。

そもそも畠山記念館の敷地は、江戸時代は豊前国森藩主の下屋敷で、維新後は薩摩出身の寺島宗則伯爵の屋敷となった場所。昭和初期に畠山一清がこの土地を買収したことが現施設開館の端緒となったが、新館を建設してのリニューアルで、より多くの人にこの館の魅力が伝わっていくことだろう。

（文：鈴木伸子）

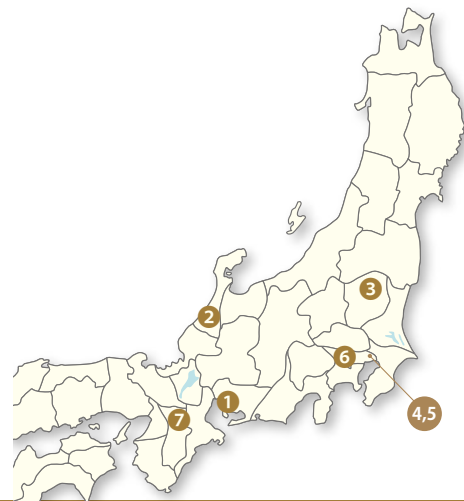
※1 トラバーチン：大理石の一つで、小さな穴が無数に開いているもの
※2 ホワイト・キューブ：余分な装飾性を排した、白い壁で四方を囲まれた展示空間
※3 框：ガラス板の周囲を囲んでいる枠（フレーム）部分



企業広報の枠を「ひろげる」 新たなコミュニケーションの場

3	2	1	
7	6	5	4

1. INAXライブミュージアム(1986年開館・2006年グランドオープン 愛知県常滑市)
2. こまつの杜(2011年開館 石川県小松市)
3. 創業125周年を記念して整備された五洋建設ミュージアム。進取の精神の実践による挑戦の歴史と未来への新たな挑戦の発信拠点として、五洋建設の歴史や未来を創造する最新技術を体験することができる。(2023年開館 栃木県那須塩原市 写真提供:五洋建設株式会社)
4. TODA CREATIVE LAB “TODAte?(トダッテ)”は戸田建設グループのみならず建設業の過去・現在・未来の姿を“見て、触って、体験して”楽しみながらこれからの建設業について理解を深めることができるミュージアム。(2024年開館 東京都中央区 写真提供:戸田建設株式会社)
5. “挑戦のシミズ”を展示コンセプトとしたNOVARE Archives 清水建設歴史資料館。220年の歴史を通じて蓄積された数々の資料を紐解き、建設業に携わってきた先人たちの挑戦を紹介している。精密な模型の展示や、大型プロジェクションによる建築や土木の大迫力の映像も圧巻。(2024年開館 東京都江東区 写真提供:清水建設株式会社)
6. 長谷工マンションミュージアムは長谷工グループ創業80周年記念事業の一つとして開館した。太古から現代まで人が集合住宅に住むようになった歴史を映像で体験できる360°シアターをはじめ、集合住宅の歴史やマンションづくりの面白さを体験できる。(2018年開館 東京都多摩市 写真提供:株式会社長谷工コーポレーション)
7. 奥村組が創業100周年を迎えられたことへの感謝の気持ちを込めて開館した奥村記念館。古都奈良の街並みに溶け込む外観をした同館では、奥村組の歩みや、免震・シールド工法をはじめとする同社の得意技術を紹介している。(2007年開館 奈良県奈良市 写真提供:株式会社奥村組)



SNS、ウェブサイト、広報誌など、企業広報のかたちはさまざまある。今号では、自社の歴史紹介にとどまらず、体験・体感型の展示を通して来訪者とのコミュニケーションを生み出している「企業ミュージアム」を紹介する。

まずは、愛知県常滑市のINAXライブミュージアム。常滑の土管産業、人々を魅了してきた美しいタイル、暮らしに欠かせないトイレ、住まいの素材である「土」など、テーマごとに7つの施設を備え、それぞれ異なる角度から土とやきものの魅力を伝えるミュージアムだ。光るどろだんごづくりやタイル絵付け体験、市民参加型のワークショップを開催するなど、地域社会との交流・連携の場にもなっている。

続いては、石川県小松市にあるこまつ杜。旧本社を復元した「わくわくコマツ歴史館」、ミニシヨベルの操作体験ができる「わくわくコマツ未来館」など、見て・学んで・体験できる施設がそろっている。なかでも、搭乗体験もできる世界最大級のダンプトラックと超大型油圧シヨベルの展示は圧巻だ。発祥の地・小松市で、地域とともに次世代を担う子どもたちを育む場となっている。

建設業の歴史や技術を「見える化」し、次代へ伝える企業ミュージアム。ものづくりの原点と現場の迫力を体感しに、この夏、足を運んでみてほしい。

Photo Gallery

※施設により事前予約が必要な場合があります



『建設技術者 START BOOK 2026』内容紹介

本冊子は、若手技術者の皆さんの成長を応援することを目的とし、建設技術者が身に付けておくべき基礎的な知識や仕事内容、成長段階ごとに必要とされる能力や資格などについて図表やイラストを用いてわかりやすく解説しています。また、生産性向上に向けた取組として、i-Construction 2.0やインフラ分野のDXアクションプラン(第2版)に関する解説を追加するとともに、働き方改革のテーマについては最新の情報に更新するなど、建設業の今後をイメージしてもらえるような内容となっています。

●冊子の概要(構成)

第1章 建設業の特徴と魅力

- 1-1 地域社会を支える建設業
- 1-2 建設業の基礎知識
- 1-3 みんなでつくる建設業
- 1-4 建設技術者の醍醐味

第2章 建設技術者の仕事

- 2-1 施工管理
- 2-2 建設技術者の種類
- 2-3 土木技術者の仕事(着手から完成)
- 2-4 建築技術者の仕事(着手から完成)

第3章 建設技術者のスキルアップ

- 3-1 建設技術者のスキルマップ
- 3-2 階層別の目標スキル
- 3-3 施工管理技士へのチャレンジ

第4章 これからの建設業

- 4-1 変わる建設業
- 4-2 生産性向上に向けた取組
- 4-3 建設業の働き方改革



『建設フレッシュマン GUIDE BOOK 2026』および『建設技術者 START BOOK 2026』のご紹介

東日本建設業保証株式会社では令和8年(2026)2月、新入社員の方を対象にした『建設フレッシュマン GUIDE BOOK 2026』および、若手技術者の方を対象にした『建設技術者 START BOOK 2026』を刊行しました。



刊行目的

地震や台風、豪雨などの自然災害が各地で猛威をふるうなか、建設業は最前線で災害対応を担う「地域の守り手」として重要な役割を果たしています。しかしながら、建設業界では技術者の高齢化が進み、若手入職者の確保、育成が喫緊の課題となっており、官民あげて対策を講じているところです。

このような状況を踏まえ、弊社では、令和4年(2022)に『建設フレッシュマン GUIDE BOOK 2022』、令和5年(2023)に『建設技術者 START BOOK 2023』を刊行し、ご好評をいただいておりますが、初版から年数が経過したため、近年の法令改正等に対応した改訂版をそれぞれ刊行しました。



『建設フレッシュマン GUIDE BOOK 2026』内容紹介

本冊子は、新入社員の方が建設業界で働く上で覚えておきたいポイントを、「3つの基本」を軸に紹介しています。SNSの使い方やコンプライアンスに関すること、熱中症対策など近年の問題について取り上げるとともに、働くことの意味など社会人としての心構えや、お客さまや取引先との接し方などのマナーの基本、建設業界全体の基礎知識などについて、イラストや写真を用いて、わかりやすく解説しています。

●冊子の概要(構成)

第1部 社会人としての基本

- 第1章 社会人としての心構え
- 第2章 自己管理

第2部 仕事の基本

- 第1章 職場の基本
- 第2章 マナーの基本
- 第3章 ビジネス文書の基本

第3部 建設業の基本

- 第1章 建設業の特徴
- 第2章 建設業法の基本
- 第3章 建設実務の基本
- 第4章 安全管理の基本

資料編



皆さまからのご要望に応え、外国人技術者の方向けに両冊子の英語版も併せて刊行しています。ご希望の際は、弊社 経営企画部までお問い合わせください。
TEL.(03)3552-7525

弊社では、この他にも若手技術者や経営者の方を対象とした小冊子を刊行しており、営業部・各支店の窓口にてお客さまに配付しています。詳しくは弊社ウェブサイトをご覧ください。
<https://www.ejcs.co.jp/>

マンガでわかる
シリーズ
サンプルはこちら



その他の小冊子
概要・サンプルは
こちら





造物主

はじめに

古代ギリシアの哲学者プラトンは、著書『ティマイオス』において自身の考える宇宙の起源論を述べました。そこにプラトンは古典ギリシア語で「公共のために働く者」を意味する「デミウルゴス」という宇宙の造物主を創造しています。

デミウルゴスはアイデアを模倣し、この宇宙を造りました。アイデアとはプラトンの哲学の中核をなす概念で、常に存在する永遠不変のものであり、デミウルゴスが造った宇宙はあくまでもその模倣でしたが、彼は善き者だったため生成されたもののなかでも美しくなったのです。

グノーシス主義

プラトンから時代が下った紀元2世紀



プラトン

頃の地中海地方では、後にグノーシス主義と呼ばれる思想運動がおこりました。グノーシスとは「認識」を意味する古典ギリシア語ですが、彼らグノーシス主義

正当な潮流

磯崎のデミウルゴスについて、彼の言葉を借りながらも少し詳しく見ていきましょう。磯崎はまず自論を展開する前に、建築家ジョセフ・リクワートのデミウルゴスを引用しています。

「デミウルゴスは強力な能力を持つてはいるが、間違った設計図でさえ、もし神がこれを与えたなら、そのまんに彫り、造つてしまふ。ときには人間にとつての恐るべき敵にさえなりうるのだ、と私は解釈する。ミノス(クレタ)に迷宮を建造したダイダロスをみるといい。彼もまた建築家＝職人で、いかえればデミウルゴスの化身だったのだ。人間にとつては恐るべき存在で、殺害されなければならないほどの非人間的な行為も平気でなしてしまふ。私はこのデミウルゴスに賦与された超人間的な能力こそが、建築家のモデルたるべきで、これをアントロポモルフィスム(人体形象主義)に対してデミウルゴモルフィスム(造物主形象主義)と呼ぶことにした」(カッコ内は著者補足)



ダイダロスとミノスの迷宮

「職人(または建築家)の神としてのデミウルゴスが操作したのは、全宇宙的空間、場、またはすべての存在を助産するものとしての、コーラにおいてだった。賢明なる統治の社会的行為、あるいは職人の素材へかたちを刻みこむ行為の如何を問わず、プラトンはデミウルゴスのやりかたが、人間の正しい行為のモデルになると考えた。建築家が建物の構成素材を配列することも、このモデルの一部である。それが洗練されていくことは、ウィトルウィウスのいうように壮大な宇宙的ヴィジョンの喚起あるいは充足なのである。造物主は、みずから宇宙的秩序と遊びながら建築家に建築とたわむれるやりかたを教える」

者たちの思想は、宇宙全体を含む可視的世界の否定を根底とし、人体は魂の監獄であるという認識を持っているため、プラトンの唱えた造物主デミウルゴスについても、「悪の王国」を造った不完全で醜い存在にほかならないと真反対に考えたのでした。

グノーシス主義者たちのあるグループが考えた造物主デミウルゴスは、「天を知らずして天を作成した」自分だけがすべてであるという傲慢で無知蒙昧な存在であり、また他のグループらは造物主として「混沌の子」を意味するとされるヤルタバオートを創造しました。

ヤルタバオートは蛇とライオンの姿を呈し、目は火のような光を放っていました。おそらくライオンは傲慢を、蛇は狡猾さを、火のような目の光は欲望を表しているのでしょう。

建築家とデミウルゴス

そのような紆余曲折を経て、宇宙の造物主「デミウルゴス」は、ルネサンス期の

変遷の20世紀における行きつく涯です。磯崎はその像を大きく変節させるのです。

神でもなく人でもない形象

磯崎はフィチーノの言に対し「デミウルゴスの役割はそのとおりだが」と前置きしたうえで、それは後世の解釈にすぎず、本来の彼は禍々しさを秘めている、として上述の自論を展開します。

また、『造物主義論』デミウルゴモルフィスム』にて、次のようにも述べるのです。

「実は順序は逆であつてこの一連の仕事(アントロポモルフィスム、テオモルフィスム)についての書籍を刊行するための準備など)をやったので、はじめてデミウルゴモルフィスムが浮かび上がった。『建築行脚』はひたすら実地でのスタディをやっていたにすぎない。建築物を読み取るための学習をしていた。ひととおりそれを終了して、やっとこんな単純な概念用語を見つけたことになった。とすればこの地点から、あらためてかつての読みとり作業を整理し形象主義(モルフィスム)でくくつてもいいだろうと思いはじめた」(カッコ内は著者補足)

ここにいう、「アントロポモルフィスム」とは人体形象主義のことであり、磯崎いわく「人体の影をあらゆる人工的な生産物のなかにさがそうとする思考」のことをいいます。

また、「テオモルフィスム」とは神像形象主義といい、いずれも磯崎の造語ですが、デミウルゴモルフィスムに考え至った経緯について「神の形象でもなく人体の形象でもない、別の格を導入するとした

磯崎新
(写真提供:共同通信社)

ネオプラトニズムによって、偉大なる建築家や芸術家のアレゴリーとして認識されるようになりました。

その頃の哲学者マルシリオ・フィチーノは「もしも道具と天の材料とを手にいれるとしたならば、人間がある程度(デミウルゴスと同じく)諸天を作ることができるといふことを誰が否定しよう」(カッコ内は著者補足)などと人間は神の力を持ちちうる存在だと賛美しています。

この認識はその後受け継がれ、例えばフランス革命期の建築家クロード・ニコラ・ドゥーなどには「建築家が備える才能と想像力に神性的な性質が宿っており、建築家の創造行為が神聖を帯びる」という思想を持つに至ります。

デミウルゴモルフィスム

これは中世ヨーロッパに限ったことなく、現代日本でもデミウルゴスたらんことを公言した建築家がいきました。それは日本を代表する建築家の1人となった磯崎新です。彼はデミウルゴモルフィ

場合、両者を媒介する役割をもち、すべてのモノを造りだし、存在を存在たらしめ、しかも芸術家・建築家・技術者の代名ともなつてきたデミウルゴスをひきだすことが適切とみえたからである」などと述べています。

グノーシス主義においてのデミウルゴスは、「神の他者」であり、至高神とは似て非なる別ものとされています。そのような存在に着目し、彼自身の建築設計理念を言い表すにふさわしいメタファーこそが「デミウルゴモルフィスム」なのでしょう。

おわりに

晩年、磯崎は卒寿のあいさつ状にて「自分は芸術・建築・都市のすべてを貫通する(アーキテクチュア)を司るデミウルゴスの化身であることを欲した」というメッセージを認めたといひます。磯崎は自身の理想とする建築家像をデミウルゴスの中に求め、この世を去る直前までその化身たることを欲するほど魅入られていました。遙か古代のプラトンの造物主として創造したデミウルゴスは、建築家をはじめとする創作者たちを惹きつけてやまない何かを発し続けていたのです。

おそらく、2400年にもわたりその姿を変貌させてきたデミウルゴスは、今後も新たな進化を遂げ続け、後代の創作者たちからさらなる造物力を引き出していくことでしょう。

(文…江口知秀)
(画…上原由子)

2026夏号をお届けします。最高気温が40℃以上の日の名称として「酷暑日」が天気予報の用語に加まりました。「猛暑日」(35℃以上)が加わったのが2007年。わずか20年で新しい用語が加わるほど温暖化が進んだのかと思うと、怖くなります。熱中症対策を万全にして、厳しい夏を乗り切りたいですね。

さて、巻頭インタビューでは、水インフラに関する記事を掲載しました。さまざまな商品の「使用上の注意」欄には、「この商品はトイレに流せます」あるいは「トイレに流さないでください」と書かれています。なぜ流してはいけないのか、深く考えたことはありませんでした。水に溶けにくいものを流すと、自宅の排水設備やポンプ場の施設を詰まらせてしまうのだそうです。どの商品を買ひ、どのように捨てるか、しっかり考えなければいけません。

また、台所でも注意が必要です。ラーメンのスープや油を流して捨てるのは、もってのほかだそうです。私は塩分を控えているので、ラーメンのスープは飲み干さずに流して捨ててしまっていました。今後は、古新聞に吸わせて燃えるゴミに出すようにしないといけません。そばやうどんのつゆは？ みそ汁は？——新たな疑問も浮かびます。油は下水管の中で硫化水素となり、下水管を腐食させます。今ある下水管を一日でも長く使い続けるために、フライパンや皿の油分はキッチンペーパーで拭き取ってから洗うなど、排水溝のその先のことを考えた暮らしを心がけたいと思います。

特集一覧

2015年	2016年	2017年	2018年
冬：へらす	冬：くみあわす	冬：しる	冬：つかう
春：もてなす	春：ささえる	春：やすむ	春：かえる
夏：さかせる	夏：つなぐ	夏：いかす	夏：ふせぐ
秋：こわす	秋：たのしむ	秋：あゆむ	秋：つたえる

2019年	2020年	2021年	2022年
冬：あたたまる	冬：とりくむ	冬：ひきつける	冬：かさねる
春：かんがえる	春：つなぐ2	春：つたえる2	春：むきあう
夏：めざす	夏：たかめる	夏：ふかめる	夏：みなおす
秋：みせる	秋：みちびく	秋：ととのえる	秋：えがく

2023年	2024年	2025年	2026年
冬：はたす	冬：かたる	冬：かがやく	冬：ねがう
春：つくる	春：あらためる	春：むかえる	春：したしむ
夏：きずく	夏：つどう	夏：かなえる	
秋：めぐる	秋：みちびく2	秋：みつける	

EAST TIMES

禁転載

東日本建設業保証株式会社
https://www.ejcs.co.jp

事業内容：公共工事の前払金保証、中間前払金保証、
契約保証、契約保証予約

公表資料：公共工事の動向、建設業景況調査、
建設業の財務統計指標

※本誌の掲載文のうち、意見を述べた部分については、執筆者の個人的
見解であることをお断りします。
※誌面に関するご意見・ご要望、送付先変更等につきましては
弊社ホームページ「お問い合わせ」フォームより送信願います。



のもとに把握できます。御城番屋敷は、城下の秩序を支える存在として城の足元を固めてきました。屋敷の端正な外観と城の威容が、制度的・空間的に呼応しているように感じられます。

ここで、より深く楽しむための散策のコツを紹介します。ポイントは視点を往復させることです。通りの端から御城番屋敷の屋根の連なりを見渡し、公開棟で室礼や建具、庭のスケールを体感したら、城跡へ登って石垣と郭の構成を一望し、町へ視線を戻します。この往復運動で「住まいの目線」と「城の目線」が重なり、風景の解像度が一段と高まるはずで、す。春は桜、秋は紅葉が、石垣を彩り、

季節ごとの陰影も楽しめます。撮影スポットとしても魅力的です。で、ぜひカメラを手に散策してみてください。

御城番屋敷は、通りの端正さと座敷の静けさ、松坂城跡の石垣の迫力が交差する、まれな場所です。城下町の原理を生活のスケールで体感でき、視野を広げてくれます。皆さんも、町と城が響き合う物語を、歩幅に合わせて楽しんでみてはいかがでしょうか。



建造当時の暮らしが分かる公開棟の座敷



天守の石垣は自然石をそのまま積み上げる「野面積み」。石と石の間に隙間ができるため、水はけが良く、崩れにくく頑丈な点特徴

(写真提供:松阪市観光交流課)

三重支店

〒514-0003

三重県津市桜橋2丁目177番地の2 三重県建設産業会館5F

TEL. (059) 226-4880 FAX. (0120) 027-536

三重・松阪の武家町景観を今に伝える「御城番屋敷」。瓦屋根が連なる端正な通りに足を踏み入れると、暮らしの気配が静かに立ち上ります。背後に控える松坂城跡の石垣にも足を伸ばせば、町と城の関係が視界いっぱいに広がります。

御城番屋敷は、松坂城の警備を担った紀州藩士とその家族の住居として、文久3年(1863)に建てられた組屋敷です。最大の魅力は、長屋建ての屋敷群が通りのスケールで連続し、武家町の趣がそのまま残っている点にあります。

見どころはいくつかあります。まずは屋敷の平面と意匠です。玄関から、表の間、土間、奥座敷へ、と進む動線は、客と家人の動きが重ならないよう配慮された設計となっています。敷居や建具の切り替えに役割が宿り、装飾を抑えた床まわりに武家の日常の機能美がにじみます。小ぶりの庭は、苔や飛び石、下草の配

し方で奥行きを演出し、座敷から切り取る借景で空間を広げます。外観は白と木部のコントラスト。瓦の陰影が光の加減で表情を変え、晴天の日は鮮明に、曇天の日は柔らかに映ります。

もう一つの見どころは、保存と利用が同居する点です。現在も生活の場として息づく棟があることで、単なる歴史遺産にとどまらず、時代をまたいで続く住文化としてのリアリティが感じられます。一方、公開棟では、屋敷の変遷、道具類や図面などが紹介され、建築当時の暮らしを知るヒントが得られます。屋外の水路や路地の幅員など、歩行空間そのものが貴重な「資料」になりますので、足元にも目を配りたいところです。

御城番屋敷への理解を深めるポイントには、背後にある松坂城跡です。松坂城は天正16年(1588)に蒲生氏郷が築いた平山城で、その

城跡の最大の見どころは、「野面積み」「打込接ぎ」「算木積み」という複数の工法が混在する、全国でも屈指の壮大な石垣です。主要部である天守台や本丸跡などには、崩れにくく頑丈な「野面積み」が採用されるなど、工法や勾配の違いから、城が「攻めにくく、守りやすい」つくりであったことがうかがえます。現存する建物はありませんが、本丸跡を中心に渦巻き状に配置された郭や、本丸跡へ向かう途中で何度も折れ曲がる動線、堀の痕跡などを見れば、城郭の防御性の高さが分かります。

また、高台からは伊勢平野を望むことができ、城と町の位置関係が一望



瓦屋根が連なる御城番屋敷の通り



三重支店から
武家町の記憶をひろげる
御城番屋敷と松坂城跡

建設産業と、ともに歩みつづける



東日本建設業保証株式会社

建設業界への入職促進・イメージアップ動画公開中！！

update

YouTube 東日本建設業保証公式チャンネル

